

遙かなる中国の大地で起きたことを、

今、自ら眺望する創造力を求めて

——『嗚呼 満蒙開拓団』を観て——

佐藤 英之

長年、精神医療問題に関わっている。その日、7月8日（土曜日）は、午前中から神田一ツ橋の日本教育会館で、精神保健従事者懇談会（「精従懇」）が行われるため、私たちは精神保健・医療・福祉に関連する書籍販売の準備に忙殺されていた。

しかし、なんとか岩波ホールの午後2時30分からの上映には間に合った。薄暗い会場には若い人も幾人かは確認できたが、大方は高齢者の人たちで観客の8割を占めていた。

「中国残留孤児」の生活保障と身分保障を求めた国家賠償請求の控訴審で最高裁判決が下された場面から映画は始まる。「不当判決」と書きなぐったステッカーが画面に浮き上がる。中国語と日本語の混在した音声がだんだん涙声になって、会場を埋め尽くした人たちの怒声と喚声のなかで掻き消されていく。

大連で生まれ育った羽田さんは、中国政府と中国人によって建立された日本人公墓の存在に始めて気づかされたのは、「方正友好交流の会」の会報であるという。大連から見れば北満の方正は遙か奥地である。かの地の日本人が戦後どうしたのか気になっていたが、その当時はそれ以上踏み込んで調べることはできなかったという。

日本人公墓の建立にいたるエピソードには、日中友好の絆と、宿命とも言うべき深い因縁を感じさせる話がある。中国人と結婚した残留日本人の松田ちゑさんへのインタビューでそのことが明らかになる。松田さんは、中国政府の荒地開墾奨励策によって土地を開墾中、偶然、日本人の累々たる屍を発見する。松田さんは何とかして骨を拾って埋葬したいと県政府に願い出る。県から省政府へ、そして中央政府の周恩来首相の決断によって許可され、「方正地区日本人公墓」という立派な公墓が中国人の手によって建立された。

しかし、紅衛兵運動の渦中で松田さんは、「日本人のスパイ」として告発され、「死刑」の判決が下されるが、外国人の死刑には県政府も慎重であったせいも、このときも県政府から省政府へ、そして中央政府へと上申されて周恩来の目にとまり、かろうじて釈放の通達が出された。このエピソードは、偶然というよりも何か宿命的なものを感じるのは、私だけではないような気がする。

「中国残留孤児」はなぜ生まれたのか。この問いに答えるのは容易ではない。その前史、満蒙開拓団の悲劇はどうして生じたのか。九死に一生を得て帰国して、今も健在な人たちへのインタビューをとおして、過去と現在が交錯する現場の情景を映し出しながら、闇に埋もれた歴史の一コマ一コマを丹念に追って幾重にも重なった断層のなかの一つの真相を

冷静にひも解いてゆく。

満蒙開拓団のスタートは、1929年世界恐慌（昭和恐慌）が日本経済を、特に農村地帯を直撃する頃から始まる。日清・日露戦争以降、植民地支配を目論む日本政府と地方自治体（市町村）が一体となって積極的に推進した政策である。2.26事件以降、軍部の圧力に屈した広田弘毅内閣の大陸進出政策によって、満蒙開拓団の人たちは満州へ行けばもっと楽に暮らせるという喧伝にのせられて何も知らないまま、中国へ、満州へと駆り出されて行った。

生き残った開拓団の人たちへのインタビューをとおして明らかになったことは、開拓団の人たちは、当時の生活はどん底でも一家が生きるために、あえて満州へ行く必然性はなかったと反省していることである。まして、関東軍と満州国傀儡政府が傍若無人に中国を支配、服従して、中国人の土地を無償にちかい形で収奪し、開拓団民に付与するなどということは知る由もなかった。

この無法な満蒙開拓団の移民が、敗戦直前まで行われていたことは日本政府や軍部や官僚の無責任な体質を象徴して余りある。軍人が国民を護るという幻想は、沖縄戦でも明らかだが、満蒙開拓団の人たちの受難は想像を絶している。集団自決しか選択の余地がなかった開拓団の人たち、幼い我が子を自分の手で絞殺、銃殺するしかなかった父母たち、寒さと飢えと疲労で病いに斃れ、落伍した親や兄弟を見捨てて行くしかなかった人たち、阿鼻叫喚の哀しい声が地の底から聞こえてきそうな気がする。

取材をとおして明らかになったことは、1945年8月9日のソ連軍の参戦による突然の攻撃や現地の中国人の襲撃を受けた開拓団の人びとの受難とは裏腹に、軍人、軍属、満州国政府要人、満鉄関係者とその家族は、いち早く豊富な物資を持って逃亡したことである。

映像から映し出される人びとは、穏やかな語り口調で冷静に当時を思い出しながら証言しているが、観ている私たちは、この国に絶望してしまうほどの衝撃を受けながら、なぜ、という疑問が頭から離れない。戦争とはそういうものだ、不条理が支配する焦熱地獄なのだ、と頭で理解しても、そうした日本人の存在を許してはいけないのだ、という断罪に心底賛意を表しながら、超然たる判官のような立場に立って彼らを断罪する己にある種の羞恥を感じてしまう。その一方で、戦争という時代の転換期のなかで、個々人の力ではどうにもならないことも事実であり、その激しい潮流に抗ってその時代を誠実に生き抜くことなど普通の人間にはできやしない、という諦念にも似た想念を抱くもう一人の自分をそこに見てしまうのだ。

新潟県出身の満州開拓民であった長田末作さんは、渡満当時15、16歳の少年であったが、「既耕地であったかつて入植したその地が、現地の人土地だった。……満州人の土地を奪ってそこに自分たちの開拓地を求め、そこで生活した、と戦後気づかされた。……あの時代、あの世の中全体の方向の中で、青少年たちが心身のすべてを賭けて生きた数年間は、犠牲とか無駄とかといったことばだけでは語りつくせない。あの生活があったからこそ今の生活がある。……だから今、万感を込めて日中両庶民の友好交流を大切にしている」（高橋健男著『満州開拓民悲史』批評社、2008年）。

敗戦とともに、我先に逃亡を企てた軍人たちやその家族と違って、九死に一生を得てかろうじて日本に帰国できた中国残留孤児たちが中国にいる高齢の養父母やその親族たちと交流する姿には、苦難の時代を真摯に誠実に生き抜いて互に日中両国の架け橋になろうとする民衆の熱い眼差しを見た想いがして安堵させられる。だが、養父母に虐められ蔑まれた残留孤児の女性の映像には、何とも言いようのない複雑な想いに駆られてしまう。

これが戦争なのだ、引き裂かれた心身の絆は、癒されることはなどあり得ないのだ、だからこの現実を直視し続けなければならないし、この現実からしか新しい日中関係は作り出せないのだと、文字の世界ではいとも簡単に言葉化できるが、映像の世界は、ストレートに問題の所在を照らし出すことはない。徐々に緩やかに、音声としての語りと映像が重層的に交錯するフィクションの世界へと観客の視線を誘いながら、一コマコマをその脳裏に焼き付けていく、ドキュメンタリーの凄さはそんなところにあるように思えた。

日本は、明治近代の時代から今日まで、精神障害者への処遇は社会防衛的視点から精神病院への隔離と收容をその基本的な施策としてきた。さらに日本は、世界に冠たる精神病院大国で現在も33万人以上の精神障害者が收容されている。医療制度改革が叫ばれ、社会復帰へのさまざまな施策が模索されながら遅々として進展しない退院促進施策は、この国の基本的な社会政策のあり方を象徴している。

国策として30万人近い国民を満蒙開拓民として中国へ入植させながら、その戦後処理としての中国残留孤児の社会復帰策の促進は、一定程度進んだとはいえ、参政権にしても、生活保障、雇用保障、医療保障などの社会保障にしても先進国の名を辱めるほどの貧困でしかなく、同じようにこの国のあり方を象徴している。

(さとう・ひでゆき：1978年9月に批評社を設立、「季刊精神医療」他、精神医療関係や「歴史民俗学資料叢書」(全15巻)、「ブント私史」「1960年代論」など、60年安保闘争～80年代の学生運動に関わる評論集など、異色の出版活動を続けている)